

3.2.2 個人のスキルを活かすボランティア活動をどのようにつくっていくのか？

ボランティアをしたいと思っている人のなかには、自分のもっているスキル（知識、経験や技術）を活用してボランティア活動をしたいと考えている人がいる。ここでは、まず、自分や仲間がもっているスキルに注目して、それを活用して対応できる地域ニーズを探し、ボランティア活動にしていった事例を紹介する。

<事例リスト>

団体名	所在地域
とおの昔話 語り部 いろり火の会	岩手県遠野市：人口 3 万人
J S K 次世代の新技术、新商品を創造する会	愛知県豊田市：人口 30 万人
松江おもちゃの病院	島根県松江市：人口 15 万人



J S K 次世代の新技术、新商品を創造する会の“かん蛙”

団体名		とおの昔話 語り部 いろり火の会 (岩手県遠野市)	
団体の概要	活動開始年	西暦 2000年 2月 活動開始	
	メンバー	人数	<役員数> 3名 <事務局スタッフ数> 2名 <ボランティア数> 20名
		構成	主婦が中心
	予算規模	平成13年度概算 ・収入 ¥640,280(商工会より弁当代と交通費の助成金) ・支出 ¥640,280	
団体の目的		<ul style="list-style-type: none"> ・遠野に昔より語り継がれる言葉の文化を次世代に正しく楽しく継承すること(口承伝承) ・とおの昔話の語り部になること 	

ボランティア活動の概要

観光客や地元住民を対象に、遠野に残る昔話を語る語り部としてのボランティア活動を行っている。駅横の物産センターの一室を無償で使用させてもらっており、そこに常駐して、希望者に昔話をしている。このほかに、ケアホームに月1回出かけて行って、入居している高齢者に昔話を語っている。

平成13年8月の夏休み期間中には830人、9月には720人の観光客や地元住民に活動を行った。観光客には、「遠野の昔話を聞いて、民話のふるさと・遠野に来たという実感をもった」と好評である。

ボランティア活動を立ち上げた経緯

遠野市は遠野昔話の語り部の育成を目的として、平成8年に「語り部教室」を開講した。幼い頃に耳で聞いた話をより確かなものになりたいという思いを持った人々が「語り部教室」に集い、柳田國男の「遠野物語」を読んだり、先輩語り部の語りを聞いたりして勉強を行った。

4～5年ほど勉強を続けるうちに、自分達の発表の場がほしいと思い、その場所を探すこととなった。その頃、遠野市で中心市街地活性化事業が実施されていることを知り、商工会に相談したところ、駅近くの商店街の空き店舗を活用して「語り部の居る休み処」を準備してもらえることになった。ここを拠点に、平成12年2月に、語り部教室の修了生21名が「とおの 昔話 語り部 いろり火の会」を立ち上げ、語り部としてのボランティア活動を開始した。中心市街地活性化事業の一環として、商工会から場所代、弁当代、交通費を補助してもらいながらのスタートであった。

商工会からの支援は平成12年3月末までの期間限定であったが、語り部のボランティア

活動は観光客や地元住民に好評を博し、継続を望む声が強くなった。このため、会員が会費を出し合い、これまで無償であった「語り部の居る休み処」を自分達の手で借りることにした。この経験が、いろり火の会のメンバー間の結束を高めることになった。

しかし、メンバーだけで活動拠点の賃料を支払っていくことが難しくなり、市商工観光課に相談にいった。市ではいろり火の会の活動を評価しており、市が所有する駅横の物産センター内の一室に活動場所を確保してもらうこととなった。いろり火の会がこの場所の管理委託を受ける形で無償で利用できるようになったのである。現在2名のメンバーが常駐して活動を行っている。

ボランティア活動に役立っているスキルの向上の工夫

いろり火の会のメンバーは、より多くの昔話をより正しく口で伝えていくことを目標に、文献を読んだり、先輩からスキルの伝授を受けたりしながら、勉強を重ねている。また、同じ地域にある NPO 法人遠野物語研究所が開いている昔話教室を受講したり、そこで語りの講師を務めたりしている。

ボランティア活動を行う上での困難点や課題

メンバーは主婦であるので、毎日2名が活動拠点に常駐することが大変である。しかし、語る楽しさと観光客との出会いの楽しさを心の糧として、都合の調整を行っている。

現在のところ、活動拠点以外の場所で出前で語りをするメンバーは1名だけである。今後は、会員全員が語りの出前に応じられるようにし、日本中に遠野の昔話を届けたい。



< 物産センター内観光案内所での活動風景 > <http://www2.ocn.ne.jp/~tmkenkyu/iroribi/iroribi.htm>

(団体代表者によるレポート、団体代表者へのヒアリング調査、団体資料より作成)

<事例のポイント> スキルの発表の場としてのボランティア活動

行政機関、社会福祉協議会、地域のボランティアセンターやボランティア協会などが人材育成のための研修や講座を開設しており、ここで知識や技術を取得した人々が、実践的な活動を行おうと考えてボランティア活動に踏み出す場合がある。この事例でも、このような構図がみられ、ボランティア活動が始まる重要なきっかけとなっている。

<事例のポイント> 拠点を獲得して活動が成り立つ

語り部としての活動には、誰もが気軽に立ち寄れる活動拠点が不可欠であり、いろり火の会のメンバーも活動を立ち上げるにあたって、最初に場所探しを行っている。このように、活動の内容によっては、活動拠点を獲得することではじめて成り立つものもある。いろり火の会では、中心市街地活性化事業が行われているという街の動向をキャッチし、商工会の協力を得ることに成功して活動を立ち上げた。活動場所を提供したり、あるいは場所探しの力になってくれそうな団体や人に関する情報提供は重要な支援である。

<事例のポイント> スキルを維持向上する工夫

いろり火の会では、日常的に語り部としてのスキル向上の努力を行っている。そのために、地域のより専門的なスキルをもった団体（NPO 法人遠野物語研究所）と連携するなどの工夫を行っている。

<事例のポイント> 主婦特有の活動上の悩みにも前向きに対応

いろり火の会のメンバーは主婦であり、ボランティア活動に割く時間をつくり出すことに苦勞をしている。これは、専業主婦がボランティア活動を行う際によく聞かれる悩みである。いろり火の会のメンバーは、ボランティア活動を通じて得られる楽しさや達成感を糧に家族の理解を得る努力をしているものと考えられる。いろり火の会の活動が地域のために役立っていることが評価される機会があると、家族や周囲の人々の理解も得やすくなっていくことであろう。

団体名		J S K 次世代の新技术、新商品を創造する会（愛知県豊田市） http://www.katch.ne.jp/m_taka/jsk.htm	
団体の概要	活動開始年	西暦 2000 年 9 月 活動開始	
	メンバー	人数	< ボランティア数 > 10 名 < 賛助会員数 > 5 社、3 団体
		構成	60 歳以上の定年退職者が中心
	予算規模	平成 13 年度概算 ・収入 ¥20,000 ・支出 ¥20,000	
団体の目的		会員の持っている高いノウハウを日本の社会、企業に役立てることで日本の繁栄につなげる。	

ボランティア活動の概要

J S K は、長い社会経験で得た「高能力集団」が、その技術やノウハウを無償提供することで、定年後の生きがいと社会に貢献することを基本理念とした「ノウハウのお助けマングループ」である。企業で働いていた技術者 O B が集まって、中小企業の依頼を受けて、商品開発の支援や経営指導にあたりたり、企業や地域活動団体の研修で講演したりするなどの活動を行っている。

これまでに、企業へのアイデア提供を通じて、超軽量の担架や、椅子状に折りたためる担架などの商品化に成功している。

ボランティア活動を立ち上げた経緯

戦後、日本が世界のどこにも例を見ない飛躍的な発展を遂げてきた要因の一つに「品質の良いものづくり」が挙げられる。その物造りを中心になって支え、現場の第一線で創意工夫し、腕を磨き改善してきた人々が今続々と現役を引退し、職場を離れて家庭でくすぶっている人がいる。また、第二の職場で年齢を理由に持てる技能とミスマッチの仕事にあまんじている人もいる。これらの人達が蓄積してきた知恵と腕（知識・技術・技能・ノウハウ・情報等）を活かし、楽しみながら創造活動を続ける場はないものか、社会貢献できる喜びを分かち合える場はないものかと話し合ったその結果、まずは近くの人達で気軽に集まれる会を作ってみようという話がまとまった。

そこで、「楽しみながらアイデアを創って、ものをつくって自分が嬉しく！他人が喜ぶ！」といったことができないかと同好の士が相集り、J S K を立ち上げた。まずは形から入れとばかりに会則づくりからとりかかった。

ボランティア活動に役立てているスキルの向上の工夫

代表自身が現役のトヨタ社員であるため、その強みを活かして、関係会社、人脈を通して各企業に働きかけ、会員の働きかけ、会員の活動の場をつくりだしている。

また、毎月 1 回の定例会議による技術、情報連絡会合を行っている。各自で考えたアイデアを絞り込み、電子メールなどで意見交換をしたあと、さらにその会合で全メンバー

が直接会って検討をしている。

ボランティア活動を行う上での困難点や課題

ノウハウの無償提供という今まで類を見ないボランティア活動であるため、活動を社会的に理解してもらうことに苦労した。そのため、2002年2月には、会員のアイデア製品を紹介する展示会を行なって、活動内容をアピールした。お年寄りが身近なものを動かすのに便利な超小型リフト、光の動きで奏でる電子楽器、川に浮かべてキャンプに使える持ち運び式水力発電機など、現物や模型を展示した。展示会は、駅前にある百貨店の9階という市民が立ち寄りやすい立地にある「とよた市民活動支援センター」のスペースを借りて開催した。

< P C (パワ - ポイント) 講習会風景 >



< 3 ウェイトタンカ > 超軽量カ - ボンシャフト製折りたたみ式担架。J S Kは折りたたみジョイント部のアイデア出しから製品化までを担当。基本特許及び製作権は(株)M社。

< ママチャリリヤ - カ - ト > 荷台にも牽引車にもなるカ - トの開発。日常の買い物、ゴミだしや震災時の荷物運搬等にも使用可。特許出願中。第56回(H14/11)発明とくふう展入賞。



今後の課題・展開

今後も、ノウハウの無償支援というボランティアを日本全国にアピールしていく必要がある。それによって、会員が「ものづくり」できる活動の場や活躍の場が広がっていくものと考えられる。ひいては、メンバーのやる気、生きがいにもつながり、活動が継続していくことになる。

また、「ものづくり」のノウハウだけでなく、J S Kのメンバー世代(J S Kではこの世

代を知年層と呼んでいる)の持っている人生経験の知識を若者に伝えることで、自分の生き方を模索している若者たちの悩みを解決したり、次世代の日本を安心して担っていきたくましい人材を育てていくような活動にも取り組んでいきたい。

(団体代表によるレポート、団体資料より作成)

<事例のポイント> 自己実現と地域貢献を両得

人脈や技術など、元企業人としてのスキルを活かすとともに、企業人時代にはできなかったことを活動に結び付け、定年後の自己実現と地域貢献の2つの目標を達成していることがポイントである。技術者のノウハウが定年で消えるのは社会にとっても損失であり、培った知恵を社会に還元することで、ボランティア本人にとっての生きがいづくりにも役立っている。ボランティア団体は、個人と地域社会をつなぐ媒体のひとつであるが、この事例は地域よりも会社で過ごすことの多かった男性にとっても取り組みやすい活動であるといえよう。

ただし、ボランティアの自己実現面のみを強調しすぎると、地域のニーズとかけ離れた活動になってしまう懸念もある。ボランティア団体を支援するにあたっては、独り善がりな活動に陥らないような視点で見守ったり、アドバイスをしたりすることが重要である。

<事例のポイント> 地域に活動をアピール

この事例は、これまで地域との接点があまりなかった人達が立ち上げた活動であるために、なかなか団体の活動が関係機関や地域住民に理解されないという悩みを抱えていた。それを打破するためのひとつの方法として、「とよた市民活動支援センター」という公共のスペースを活用して市民に広くアピールすることに努めたという。

このように、ボランティア団体が活動のために気軽に利用することができる公共的なスペースは、活動を軌道にのせるための重要な社会資源である。

<事例のポイント> 組織生活の長かった男性にも馴染みやすい運営方法

会則、活動の趣旨説明書、企画書などのツールが充実しており、元企業人にもなじみやすい組織運営方法がとられている。

ボランティア団体の場合、NPOとは異なり、必ずしも「正式的に組織化されている」ことが求められるわけではないが、会社での生活が長かった定年男性にとって、組織運営方法が明確化されていることは、違和感なく受け入れられる組織文化である場合が多い。なお、この場合には、ボランティア団体の組織化を強固にすることに注意を注ぎすぎないように、また、ボランティア同士が対等で自由なディスカッションのもとに意思決定を行うというボランティア活動のエネルギーの源泉を見失わないように見守っていき、必要に応じてアドバイスをおこなっていくことが求められよう。

団体名		松江おもちゃの病院（島根県松江市）	
団体の概要	活動開始年	1994年 1月 活動開始	
	メンバー	人数	< ボランティア数 > 15名
		構成	定年退職の男性、主婦、会社員男性 体験学習の一環として中学生も参加
	予算規模	平成13年度概算 ・収入 ¥40,000(基本的には松江市ボランティア協会(現・連絡協議会)からの助成金。年度によっては、企業からの助成金をもらうこともある。会費は徴収していない。) ・支出 ¥39,148	
団体の目的		・子供とともに生きる心の病院として、「心の豊かさ」の課題意識を啓発するとともに、子供が大切にしているおもちゃの修理を通して、子供たちに物の大切さ、命の尊さを知らせ、心優しい子育てに貢献すること。	

ボランティア活動の概要

定期的な日時に都合のつくスタッフが集まって「病院」を開設し、ボランティアでおもちゃを修理する活動を行っている。時には関連組織、団体などのイベントにも参加して、「病院」を開設している。

おもちゃの受付件数は少しずつ増えており、平成13年度3月末の合計で、1,190件になる。

活動場所は松江市子育て支援センターや松江市津田公民館、松江市ボランティアセンターなどの場所提供を受けている(料金は無料、公民館は光熱費のみ)。

ボランティア活動を立ち上げた経緯

現在の「おもちゃの病院」開設以前に、松江市の工業専門学校の学生数名が同様の活動をしていたが、卒業などで継続していくことができなくなり、活動がストップしていた。そのため、当時の工具等が松江市ボランティアセンターに残っていた。

平成5年度にボランティアセンター主催で、「ボランティアワーカー養成講座(以後8期まで開催)」が約一年間にわたって行われた。同講座は、ボランティアのリーダーないしコーディネーターを養成するための講座であった。

講座修了後、その一期修了生の中から有志を募ってボランティア活動を始めることとなった。ボランティアセンターから以前のおもちゃ修理の活動について紹介があり、電気関係の技術を持った人が受講生の中にいたので、彼を「院長」として、「おもちゃの病院」

が始まった。

最初はどのようにPRしてよいか分からず、市内の保育所などを回り、説明しながら、おもちゃを集めて修理していた。初めてイベントに参加した際、手作りのポスター、チラシを用意し、松江市の幼稚園、保育所の園長会でお願いして置かせてもらった。それ以後、イベントなども合わせて、少しずつ知ってもらえるようになっていったと思う。

松江市ボランティアセンターには、開設当初から協力してもらっている。立ち上げ時から工具や事務用品などの収納のために、ボランティアルームの中にロッカーを用意してもらい、その上、事務局もボランティアセンター内に置かせてもらっている。また、開院日ではない日におもちゃを持って来る方の対応もしてもらっている。こういった面では、非常に恵まれている。

ボランティア活動に役立っているスキルの向上の工夫

立ち上げ当初には、多少の予算と工具などは揃っていたものの、電気技術を持っている者が1名しかおらず、手早く対処しきれないことが多々あった。当初はメンバーをボランティア講座の修了生に限っていたが、修了生は女性が多く、技術を持つ人がなかなかみつからなかった。

そこで、市の広報で会員募集の呼びかけを行ったところ、主に退職者を中心にボランティアが集まった（中には中学生もいた）。現在では、活動を行うにあたって、ボランティアの電気関係の技術、木工関係の技術、裁縫関係の技術を活用している。

また、受付方法やカルテの整理などまったく手探り状態であったが、「おもちゃ病院連絡協議会」のカルテ様式などを利用しながら改善に努めた。今後も自分たちに使い勝手のよいように改善していきたい。

活動を継続するための心構え

活動日に出掛けることについて、絶対に無理をしないようにしている。

一方、ボランティアだからと言って、決していい加減なことはしないようにしている。また、個々に責任をもって対処することなどに気をつけている。修理について個々人で分からないことがあった場合などは、その都度メンバー間で話し合い、協力して取り掛かっている。そして、活動を楽しもうと心掛けている。

ボランティア活動を行う上での困難点や課題

ボランティアの募集方法は、「スタッフ募集しています」というチラシをイベントなどで配布したり、個々に誘ったりしている。できる限り活動を続けていきたいので、今後になげられるような若い年代のスタッフがもっと欲しい。そのために、仕事を持っている人でも活動しやすいように定期活動日について検討していきたい。

現在、「親子で一緒に修理しましょう」と呼び掛けているが、あまり効果がない。また、

できる限り、子供たちの目の前で修理したいとの夢があるが、思うようになっていない。これも定期活動の開院曜日と関係があるかも知れない。

これらを踏まえて、定期活動の曜日に日曜日を含めるよう変える予定。

また、活動資金は現在は徴収していないが、今後の具合を見ながら、会費を徴収するかどうかについても話し合っていきたい。



<ただいま診察中>

(団体代表によるレポート、団体代表及びボランティアセンターへのヒアリング調査、団体資料より作成)

<事例のポイント > ボランティア養成講座が活動開始のきっかけ

この事例では、ボランティアセンターが「ボランティアワーカー養成講座」を主催し、人材育成を行うとともに、受講者に対して活動内容の紹介を行っている。ボランティアセンターがきっかけを作った事例である。さらに、ボランティアセンターは連絡の取り次ぎや備品の収納などの事務局代行機能を果たしており、この活動の継続を支えている。

行政からは場所の提供や広報などで支援を受けており、公的支援を上手に活用して活動していると言える。

<事例のポイント > ボランティア活動の心構えをしっかりと意識

ボランティア活動は、活動する本人の自主性・自発性が重要であり、無理をしないで、楽しんで取り組むことは、活動の継続のためにも大切な姿勢である。しかし、社会と関わっていく活動である以上、無責任で許されるものではない。ボランティア活動を進めていくためには、「無理をしない」「活動を楽しむ」「責任をもって対処する」「分からない場合は協力する」といったバランス感覚が必要となる。

<事例のポイント > 子どもとのふれあいが活動の原動力

ボランティア活動は、単にスキルを活かすことだけでなく、メンバーが活動を楽しむことができるかどうか重要である。この事例では、おもちゃの修理という活動を通じて、子どもとふれあい、子どもから素朴な賞賛を得ることが、活動の原動力とも言える“楽しみ”や“やりがい”となっている。

一方、この事例の場合、その願望が必ずしも満たされていない点も指摘されている。地域のニーズを掴み、かつ、自分たちの願いを満たしていくために、活動スケジュール（曜日）や呼びかけの対象など、ボランティア活動の進め方について再考していくことが課題となっている。

<事例のポイント > 活動内容にあわせて、メンバーの範囲を拡大

当初はメンバーをボランティア講座の修了生に限定していたが、修了生の中では活動に必要とされる技術者が集まらなかったため、広く一般に募集をかけ、現在のメンバーを集めている。

きっかけがボランティア講座であっても、活動内容にふさわしいメンバーを集めていくためには、柔軟にメンバーの範囲を考えていくことが必要である。